



田中久美子(たなか・くみこ) 乳腺外科副医長 1991年産業医科大学医学部卒業。93年から浜松労災病院外科(スズキ株式会社産業医を兼任)。2000年から癌研究会附属病院乳腺外科、02年に癌研究会癌研究センター乳腺外科副医長。研究領域は乳癌病理、乳腺画像診断(主に超音波)。

女性に最も多いがん

乳がんは女性のがんの中では最も多いがんで、40代、50代で多く見られます。日本では年に約3万5000人の女性が乳がんにかかっており、女性の25人に1人が乳がんにかかるというわれています。また、年に約9000人の方が乳がんで亡くなっています。

乳がんは自分で触れることができ、自己検診での発見が可能です。患者さんの約8割がしこりに気がついて来院されます。できれば30代から、マンモグラフィで初めて見つかる

もっと知りたい! がん医療



〈企画・制作／静岡新聞社営業局〉

細胞診で5段階評価

婦人科のがんにはいろいろな種類があります。子宮の比較的出口のほうにできる子宮頸(けい)がん、子宮の奥のほうにできる子宮体がん、卵巣がん。そして、頻度が低くありますが、卵管がん、外陰がん、膣がんなどがあります。

私もが開院してから約2年になりますけれども、入院した患者さんの病名を見てみると、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がん3つで婦人科の患者さんの95%を超えます。



山田義治(やまだ・よしはる) 婦人科部長 岐阜県生まれ。文系学部を卒業後、三井記念病院(東京)、国立がんセンターの門病院(東京)を経て2002年から県立静岡がんセンター婦人科部長。趣味はスキー。

早期のがんは、これから検診が普及していけば、多く出てくるはずですが、早期に治療を始めることができれば、がんの脅威は遠のきます。もう一つの乳腺の診断における大事な検査が超音波検査(エコー)です。超音波というのは、腫瘍の良性、悪性を問わず、小さなしこりを見つめるのが非常に得意です。乳腺が厚くてマンモグラフィで見にくい場合などは併用されることが望ましい検査です。

乳がんの診断と治療

乳腺外科副医長 田中久美子氏

乳がんの診断において触診、マンモグラフィ、超音波検査、3本の柱です。検査の結果、がんが見つかった、あるいは悪性の可能性がある場合は、我々の施設ではMRIを

の広がりや局所的であれば、部分切除を行います。部分切除は乳房を部分的に切除する乳房温存手術で、丸く取る、あるいは乳頭に向かって扇形に取ったりします。乳房の中心に取ったりします。乳類によっては脱毛や吐き気と、点状副乳切除が行われます。乳頭、

抗がん剤による治療の場合、使う薬は、その方のがんの状態によってさまざまです。すべての抗がん剤で白血球が減るほか、抗がん剤の種類によっては脱毛や吐き気と、点状副乳切除が行われます。乳頭、

がん医療の最前線を総合的に学ぶ県立静岡がんセンター公開講座「もっと知りたい!がん医療」(静岡新聞社・静岡放送主催、同センター共催、学校法人原学園専門学校白寿医療学院協賛)の第3回講座が先月16日、駿東郡長泉町の同町文化センター・ベルフォーレで開催されました。同センターの田中久美子乳腺外科副医長が「乳がんの診断と治療」、山田義治婦人科部長が「婦人科がんの診断と治療」をテーマに講演しました。その概要を紹介いたします。

がん医療の最前線を総合的に学ぶ県立静岡がんセンター公開講座「もっと知りたい!がん医療」(静岡新聞社・静岡放送主催、同センター共催、学校法人原学園専門学校白寿医療学院協賛)の第3回講座が先月16日、駿東郡長泉町の同町文化センター・ベルフォーレで開催されました。同センターの田中久美子乳腺外科副医長が「乳がんの診断と治療」、山田義治婦人科部長が「婦人科がんの診断と治療」をテーマに講演しました。その概要を紹介いたします。

重要な進行度の確認 頸がんの治療には手術、放射線治療を行う場合があり、追加治療として用いられる

抗がん剤には副作用があります。吐き気、何となくだるい、手先がしびれる、耳鳴りがする、髪の毛が抜けるという副作用があります。果たしてやっつけたいものかどうかという効果判定がどうしても必要になります。治療というのは効果がそれによって受ける副作用や後遺症による損害を上回る時にはじめて行われるものです。治療によってはいくつかの選択肢があることがあります。例えば、このがんのこういう状態に対しては、放射線と手術という手だてがあり、それぞれの治療法には、こういったメリットとデメリットがあります。そして最終的には本人の選択となります。がんセンターでは、まず本人に話をして治療方法を決めていくというような戦略をとっていますので、がんセンターを受診される方は、よくそのことを理解して、来院いただきたいと思っています。

婦人科がんの診断と治療

山田義治氏 婦人科部長

いわゆるがん検診のことで、子宮の出口のところから細胞を取ってきて、細胞1個1個を顕微鏡で見て、がんがあるかみていきます。そして、正常なクワソールから、誰がみてみてもがんであるクワソールまで、5段階で評価をします。

抗がん剤療法は、主治療として抗がん剤を用いる場合と、補助療法として、放射線の効きを高めるために使用する場合があります。この3本の柱をうまく組み合わせ、子宮頸がんの治療をしています。

卵巣がんは、頸がんと同様に、抗がん剤を用いる場合と、補助療法として、放射線の効きを高めるために使用する場合があります。この3本の柱をうまく組み合わせ、子宮頸がんの治療をしています。

細胞1個1個の顔 放射線も治療によく用いら

子宮体がんは、がん検診でみつかると不正出血で来院するケースが多くみられます。頸がんと同様、細胞診と組織診を行い、がんが見つかった場合には、どれだけ広がっているかを診断して、それによって治療法を決めていきます。

卵巣がんは、頸がんと同様に、抗がん剤を用いる場合と、補助療法として、放射線の効きを高めるために使用する場合があります。この3本の柱をうまく組み合わせ、子宮頸がんの治療をしています。